

「日本/ユネスコパートナーシップ事業」

日本ユネスコエコパークネットワーク 会議報告書（概要版）



綾



南アルプス



白山



志賀高原



大台ヶ原・大峯山



屋久島



只見

主 催：文部科学省、長野県山ノ内町
共 催：日本ユネスコエコパークネットワーク、日本 MAB 計画委員会、

日 程：平成27年10月6日（火）～10月8日（木）
会 場：志賀高原総合会館98（長野県山ノ内町）

この事業は平成27年度「日本/ユネスコパートナーシップ事業」として
文部科学省の委託を受けて実施しました。

1 スケジュール

10月6日(火) 13:00~20:00

事前相談会

日本ユネスコエコパークネットワーク (JBRN) 総会

共同記者会見

日本ユネスコエコパークネットワーク幹事会

東アジア生物圏保存地域ネットワーク (EABRN) 及び

日本ユネスコエコパークネットワーク合同歓迎晩餐会

10月7日(水) 9:00~18:15

(会場: 志賀高原 前山~四十八池湿原)

東アジア生物圏保存地域ネットワーク及び

日本ユネスコエコパークネットワーク合同現地見学会

全体会 (MAB計画を巡る近況など)

分科会 第1分科会「ブランディング検討会」

第2分科会「管理運営計画検討会」

全体会 (まとめ)

10月8日(木) 9:00~17:30

※東アジア生物圏保存地域ネットワーク (EABRN) 合同セッション

志賀高原現地見学会の評価

日本国内のユネスコエコパーク (BR) の紹介

EABRN 参加国からのカントリーレポート

※大会期間中、会場内において国内BRのポスター展示を行いました。

2. 参加者

文部科学省 (日本ユネスコ国内委員会)、環境省

ユネスコエコパーク登録地

(志賀高原、屋久島、白山、大台・大峯山、綾、只見、南アルプス)

日本 MAB 計画委員会

登録検討地 (十和田地域、みなかみ地域、祖母傾地域、山梨県、木曾地域)

筑波大学、国際協力機構 (JICA)

※東アジア生物圏保存地域ネットワーク 参加国 (日本、ロシア、中国、モンゴル、韓国、カザフスタン)

3. これまでの経過

日本ユネスコエコパークネットワーク（JBRN）は2010年9月30日の日本MAB計画委員会（委員長：横浜国立大学松田教授）において、日本のユネスコエコパーク（BR）登録地とこれから登録を準備する地域のネットワークとして設立されました。その活動は主にメールリストによる情報交換でした。

2013年10月に只見町において文部科学省主催による第1回日本ユネスコエコパークネットワーク会合が開催されました。この会合により、JBRNはメール上のネットワークから地域担当者が直接会って交流する実体を持つことになったのです。それに伴い、今回ネットワークの位置づけと参加地域を見直すことになりました。

これまでは、日本MAB計画委員会がネットワークを運営してきましたが、今後は日本で登録されている7地域がネットワークの運営を引き受けることとなります。自治体が主体的に情報交換を進めていくことになり、文部科学省とは制度全般的に、日本MAB計画委員会とは学術的に、それぞれ連携しながら取り組みます。今までの体制が大きく変わるため、日本ユネスコエコパークネットワーク規約の改正や役員を選任、事業計画などが確認されました。

4. 日本ユネスコエコパークネットワーク趣意書（2015.10.6）

21世紀の自然界を取り巻く環境は、世界的な規模の気候変動、急速な人口構成の変化、産業再編とグローバルな企業間競争など、様々な要因から大きな変革の時代を迎えており、人類は新たな課題に向き合おうとしています。

特に、地方においては、新たな開発のほか、過疎化、若者や企業の大都市圏への流出、地域産業の衰退などの社会環境の変化により、これまで保たれてきた生態系にも大きな影響が懸念されています。

これらの課題を解決するため、ユネスコにおいて、生物多様性の保全と利用を通して地域社会の持続的な発展を目指す「Biosphere Reserve（日本における通称：ユネスコエコパーク）」が推進されています。ユネスコエコパークの取り組みは、各主体の連携を図り、自然や文化を保全・継承しつつ、地域社会を発展させていくものです。

日本でのユネスコエコパークにおいては、それぞれの登録地域が、地域資源を活かし、地域にあったやり方で持続可能な社会を自らの手で創り上げるとともに、登録地域間のネットワークを構築し、調査・研究の成果、事業の戦略、ノウハウ等を共有することで、魅力ある地域づくりの取り組みがより活性化することが期待されています。また同時に、世界のユネスコエコパークとの連携を深めることにより、地球規模の持続可能な社会づくりにもつながります。

このネットワークは、日本国内におけるユネスコエコパーク活動の地域間連携を促進し、一つの地域では対処できないような課題への対応、社会への働きかけなどを行い、ユネスコエコパークの理念に基づいた人間と生物圏とのより良い関係を築いていくことを旨とするものです。

5. 会議内容

10月6日（火）

○事前相談会

・ユネスコエコパーク登録を目指す地域に対して、ユネスコエコパーク登録地域（白山、大台ヶ原・大峯山、屋久島が対応）と日本MAB計画委員会委員が相談に応じました。みなかみ地域、祖母傾地域などから相談がありました。

○総会

・日本ユネスコエコパークネットワーク（以下 JBRN という）趣意書、同規約の改正、同役員を選任、平成27年度事業計画及び予算について議され、すべての議案は満場一致で可決されました。JBRN は7つのBR管理運営団体を正会員とする、地域主体の組織に生まれ変わりました。



○共同記者会見

・JBRN の再編について、国内ユネスコエコパークの代表者（首長）は、日本MAB計画委員会、日本ユネスコ国内委員会事務局の同席のもと、共同記者会見を実施しました。「それぞれの地域が一緒になって核心地域・緩衝地域を守り、未来へ残していきたい」などと抱負を述べました。

○第1回幹事会

・総会での規約改正を受けて、JBRN の第1回幹事会が開催されました。議事では、規約に基づき運営ワーキンググループを設置することが承認されました。



幹事会の様子

○合同晩餐会

・東アジア生物圏保存地域ネットワーク会議（以下 EABRN という）出席者との合同による晩餐会が開催され、地元からは間伐材を材料に誕生した楽器コカリナの演奏がアトラクションとして提供されました。首長同士の交流や、EABRN 代表との交流が深まりました。

10月7日（水）

○合同現地見学会

・EABRN 会議出席者との合同による現地見学会が開催され、志賀高原ユネスコエコパークの核心地域、四十八池湿原を往復するコースを散策しました。現地見学会は、EABRN メンバー・JBRN メンバーを織り交ぜた小グループに分かれて実施され、各グループではネイチャーガイドの話す日本語を通訳者が英語に訳す形式でガイドツアーが進められました。



現地見学会の様子

○全体会（MAB計画を巡る近況など）

・組織としての決定を行う総会とは別に、ユネスコエコパークに関わる実質的な議論を行う場として、全体会・分科会が開催されました。

・この全体会では、日本ユネスコ国内委員会事務局から、この1年間の日本ユネスコ国内委員会MAB計画分科会の活動、MAB計画国際調整理事会やユネスコエコパーク世界大会、ユネスコ総会でのジオパーク公式プログラム化の審議や国連総会で採択されたポスト2015年開発アジェンダについて説明がありました。



全体会の様子

続いて白山ユネスコエコパークから、第27回MAB計画国際調整理事会での各国のユネスコエコパーク登録審査の場面について詳細な報告がありました。最後に日本MAB計画委員会の朱宮氏から、ユネスコエコパークの概要について、おさらいとしてMAB計画の理念やボトムアッププロセス、ゾーニングなどについて、説明がありました。

○分科会（ワーキンググループ）

・分科会では、第1分科会のブランディング検討会、第2分科会の管理運営計画検討会のテーマ別に2つの分科会が開かれ、より小

な規模で議論が展開されました。



第1分科会

○全体会（まとめ）

・全体で集まり、各分科会における議論の内容が報告されました。

・第1分科会座長の廣瀬氏（南アルプスユネスコエコパーク）からは、普及啓発とブランディングに分けて議論する予定でしたが前者で終始してしまったこと、BRが何かということを知りやすく伝えるものが必要ではないかとの話題が上がったことが紹介されました。



第2分科会

・第2分科会座長の中村氏（白山ユネスコエコパーク）からは、管理運営計画にどんな要素を盛り込むべきか、各ユネスコエコパークでの管理運営計画の検討状況はどうか、世界のユネスコエコパークの管理運営計画の現状はどんなものかについて、話題提供がな

れ、その後、小グループに分かれてどのようなプロセスで管理運営計画を策定すべきか議論があり、既存の計画との整合性を図る必要やゾーンごとに計画を考える必要があること、住民参画を図る必要性は一致しておりその方法は様々に考えられるとまとめられました。

・日本MAB計画委員会副委員長の酒井氏から、総まとめとして2つの分科会において住民をどう巻き込むかという観点が共通していること、日本の取り組みは世界の最先端になりうると講評がありました。

10月8日（木）

EABRN と JBRN の合同セッションとして、JBRN メンバーが EABRN 会議に参加する形で実施されました。会議の言語は英語でしたが同時通訳によって発表されました。

○志賀高原ユネスコエコパークの現地評価

・前日実施された現地見学会の評価が行われ、EABRN メンバーからは、移行地域を設定した経緯や管理システム、主要な脅威や看板について質問が出されました。また、核心地域の露出や、核心地域が小規模であることについて指摘がなされました。



EABRN の現地見学（リンゴ畑）

○日本国内のBRの紹介

・日本の各ユネスコエコパーク（屋久島、綾、

大台ヶ原・大峯山、白山、南アルプス）の担当者より、EABRN メンバーに向けて、それぞれのユネスコエコパークの紹介プレゼンテーションがありました。（EABRN 会議初日に紹介済みの志賀高原ユネスコエコパークと、この日欠席の只見ユネスコエコパークを除く）。また、JBRN を代表して白山ユネスコエコパークから、日本ユネスコエコパークネットワークの進展について、前日までの大会の様態も織り交ぜながらプレゼンを行いました。



合同セッション

・EABRN メンバーの韓国からは、同国で同様のネットワーク構築を準備しており非常に参考になる等、数多くの質問・コメントがありました。

○EABRN 参加国からのカントリーレポート

・日本をはじめ、カザフスタン、モンゴル、韓国、ロシアから自国の状況について発表がありました。北朝鮮については、EABRN に出席できなかったため、代理としてユネスコ北京事務所より状況の報告がありました。

・日本からは、日本ユネスコ国内委員会MAB計画分科会調査委員の岩熊氏より、日本のBRの申請状況、ESD・ユネスコスクール・サステナビリティサイエンスとの関わり、ゾーニングの基準、ユネスコへの資金提供、普及啓発について報告がされました。

・カザフスタンからは、トップダウンのプロ

セスから始めた体制をボトムアップ型に転換する準備ができてきたことが報告され、また日本の JBRN のサクセスストーリーへの敬意が表されました。

- ・モンゴルからは、地域のための研修を実施していることなどが報告されました。
- ・韓国からは、韓国MAB委員会がユネスコ国内委員会から環境省に移されたこと、JBRN



合同セッション

のように国内ネットワークを立ち上げようとしていることや、各ユネスコエコパークではロゴマークを付した認証制度を設けていることなどが報告されました。

- ・ロシアからは、国土が東西に広いため国内ネットワークで集まるのは難しいこと、東西のバランスがとれるようアジア側でもっとユネスコエコパークを登録したいことなどが報告されました。
- ・ユネスコ北京事務所からは、EABRN 事務局の活動報告として、前回会議以降の登録地域や研修会についての報告があり、この他、JBRN の今回の取り組みについて、ユネスコ本部などの世界レベルに必ず伝えるとの発言もなされました。

6. まとめ

国内外で共通した課題は、住民をどう巻き込んでいくかにあり、それぞれの登録地域に住む地域住民が、自らの地域資源や生活を誇れるようになることが一番の目標といえま

す。

また一方で、活動の結果を数値的に表すことは難しく、住民が成果を感じ取れない場合は、継続性に問題が生じることも検討していかなければならないでしょう。

数値的な評価ができなくとも、住民らの活動が、周辺地域の住民や、行政、政府機関など周囲の人々によって、適切に評価され尊重されることが必要だといえます。

さらに、学術研究者が地域に関わりを持っていることも必要です。地域住民は地域の文化や伝統を重んじた活動だけでなく、科学的な見地から地域の活動に携わっていかなければなりません。

ユネスコエコパークは地域住民や自治体を中心となり、日本 MAB 計画委員会や、政府機関と、経験や情報を共有しあい、引き続き JBRN のネットワークを強化していくことで、日本国内全体が、「人間と自然との共生」とユネスコが定める新たな MAB 戦略（2015～2025 年）での下記 4 点の項目の達成を目標とした活動を継続して進めます。

- (1) 生物多様性と生態系サービス
- (2) 持続可能な経済・社会と人間居住
- (3) サステナビリティ・サイエンス（自然科学・社会科学の融合と政策決定者・地域コミュニティの参画）と ESD（持続可能な発展のための教育）
- (4) 気候変動への対応

著：酒井義之（志賀高原ユネスコエコパーク）

中村真介（白山ユネスコエコパーク）

編集：日本ユネスコエコパークネットワーク事務局
（志賀高原ユネスコエコパーク）